

森を建てよう。

道産材に活路。旧態とした住宅供給システムに革命

経済産業省「中小企業基盤整備機構」主催の「ジャパンベンチャーアワード2010」で、間伐材を利用した高品質でリサイクル可能な住宅づくりを可能にする住宅供給システムの構築が評価され、環境特別賞を受賞したHOPグループの石出和博代表取締役CEOにお話を伺いました。

HOPグループ代表取締役 CEO

石出 和博



トップの発想

The Interview 第1回

北海道を舞台に、さまざまな分野の第一線で活躍する経営者たち。斬新な視点と実行力、新しい時代を切り開いているチャレンジャーは、混沌とした今の時代をどう見つけ、次へ進もうとしているのか。「トップの発想」北海道の企業が発信する、北海道の元気を、この春より北海道新聞とUHBの共同企画でお届けします。

道産間伐材を使った独自のHOPシステム

水野 この度はJVA（環境特別賞受賞おめでとう）をいただきます。評価された点を教えてください。

石出 ありがとうございます。住宅産業におけるベンチャー、しかも環境賞での受賞は初めてといわれています。私たちが北海道の間伐材にこだわり、特許技術を開発することで木の特性を生かした家造りを15年間コツコツ継続してきた活動の意義を認めていただいたのだと感謝しております。

水野 その特許技術を含めた、独自の住宅供給システムはどのようなものですか。

なものでしょうか。

石出 「HOPシステム」というのが、これは木を育てる人、伐採や製材に携わる人、そして家を建てる建築業の人が協業することで、木材の産地直送と流通コストの大幅な削減を実現したものです。つまり、原木の確保から流通、設計、建築までを自社で貫き、従来の住宅建築のあり方を根本から見直した新しいシステムです。

水野 木材の産地直送というところで、道産材にこだわっているということですね。

石出 これは第一に「地元の森林を活用することで、森が再生し、守ら

れる」という思いがあるからです。間伐材は人工林、天然林とは異なり、定期的に間引きすることで生育します。広大な森林面積を誇る北海道にはラマツなどの人工林間伐材が豊富ですが、当時は人工林を活用したくても技術的、流通的な障害が多々ありました。

そのうえ流通の主力は輸入木材。近年は中国の旺盛な建設需要の影響で世界的にも木材価格が高騰しており、今こそ道産の間伐材の出番だと思っただけです。間伐材から森を保護しながら、木の特性を生かした高品質住宅の建築が両立できるのです。

る」という思いがあるからです。間伐材は人工林、天然林とは異なり、定期的に間引きすることで生育します。広大な森林面積を誇る北海道にはラマツなどの人工林間伐材が豊富ですが、当時は人工林を活用したくても技術的、流通的な障害が多々ありました。



石出 和博
Kazuhiro ISHIDE

HOPグループ（ハウジングオペレーション株式会社、アトリエム株式会社、株式会社藤田工務店）代表取締役 CEO、建築家。1946年芦別市生まれ。73年藤田工務店入社、宮大工の技術を学ぶ。89年一級建築士事務所アトリエム設立。筑波の建築業集団を率いて全国で作品を発表。96年林野庁と北海道の支援を受け、新しい住宅供給システムHOPを設立。現在に至る。林野庁長官賞（木材供給システム優良企業）、経済産業大臣賞（消費者志向優良企業）など多数の受賞歴を持つ。

聞き手
水野 悠希
Yuki MIZUNO

北海道文化放送アナウンサー。東川町生まれ。「のりゆきのトクDE北海道」キャスター、「ゆうゆう金曜日」出演中。ニュース、情報・バラエティー番組など幅広く経験。東川町観光大使。

曲がる、割れる。逆転の発想で特許取得

水野 特許を取得された技術についてお聞かせいただけますか。

石出 例えば北海道に多いカラマツは、曲がる、割れるなどの理由で利用されていませんでした。シラカバに至っては建材としては見向きもされません。そこで、「曲がらないようにすれば使えるのではないかと発想を転換したのです。」

道立林産試験場と共同で木の乾燥技術の開発に成功し、そこから道が目指した。木材の産地直送を、間伐材の特性を生かした部材の開発や規格化を試みたのです。

特許を取得した4面スリット工法や実用新案登録をした継手金物など、独自の技術を組み合わせたことで、部材調達だけでなく工法技術の向上やリサイクル方法まで追求しました。

水野 いろいろと苦労も多かったと思いますが。

石出 北海道は豊かな森林に恵まれ、ベニヤやつぼうじ、割りはしを造る工場などが多く、扱う木材も違います。

しかし製品が売れないと、どの工場も粉砕し、安価なチップ材にしていたんですね。私はそれを身近に見ていたんです。工場を軒ずつ訪ねて廃棄物同然だった木材を集めて板に替え、建築資材として使えるものにしてと説得しました。

現在は北海道に多いカラマツやトドマツ、タモやシナなど、多種を扱えるようになりました。

水野 家造りに個性の幅が出ますね。

石出 そうなんです。家とは住む人の価値観や人観を映し出す空間だと私は考えます。効率や低価格だけを追求した画一的な住宅では、多様なお客さまの価値観を表現できないと思うのです。

水野 今回はモルハウスにお邪魔しておりますが、この茶室は心が洗われる空間ですね。

石出 ありがとうございます。これは畳半という大きさを、千利休の孫である宗旦が完成させた侘び茶の究極の姿です。今日庵など今に残る歴史的な茶室と同じ大きさを紙ごとで再現したものです。



茶室—畳台目 HOPモデルハウスにて

足元の財産に目を向け、可能性を追求する

水野 HOP住宅を建築されたお客さまには、「エコ証明書」を渡しているそうですね。

石出 木製の「証明書」なのですが、地球温暖化の「因」とされるCO₂（二酸化炭素）の削減量を記載しお渡しています。

水野 お客さまもエコ活動に参加できたという誇りが持てますね。

石出 HOPグループ3社は、流通、設計、施工の各部門でSGEC「緑の循環」森林認証^{※1}を取得しています。これは荒廃した日本の森をかつての豊かな姿によみがえらせるため、適切に管理された木材を活用しているという証です。3部門で認証を取得したのは国内初です。

水野 天然林の保護と建築資材の調達、その両立に挑戦したのが「HOPシステム」ですね。

石出 北海道には豊かな自然があり、チャレンジャー精神にあふれる気質もあります。まずは足元の財産に目を向け、それをどう生かすのか。自分たちの可能性を信じて、できることを徹底的に考える。その中に北海道活性的のヒントがあるのかもしれないですね。

水野 最後に、今後の石出社長が目指すものを教えてください。

石出 「家造り」はお客さまの財産を作る「こと」同義語だと思っています。それは住む人にとつての「人生の場」。棟に思いの込められた家が集まると、そこに街並みができます。私はこの街並みこそが地域や国の価値観を反映した文化の一つだと考えています。つまり、家造りは文化づくりの翼を担っている。そんな意識を持って後世に残る家造り、街並みづくりに微力でも貢献できたらと思います。

※1 2003年国内初の森林認証制度としてスタート。「持続可能な経営を行う森林から生産された木材」を認証する制度。
※2 Japan Venture Awardsの略。起業家精神に富む経営者や地域社会・経済に貢献した経営者を表彰する。
※3 3棟を特別公開する新築見学会を開催いたします。詳しくはフリーダイヤル0120-551,248へ。またはホームページでご確認ください。
www.hophouse.co.jp HOP



HOP作品/HB